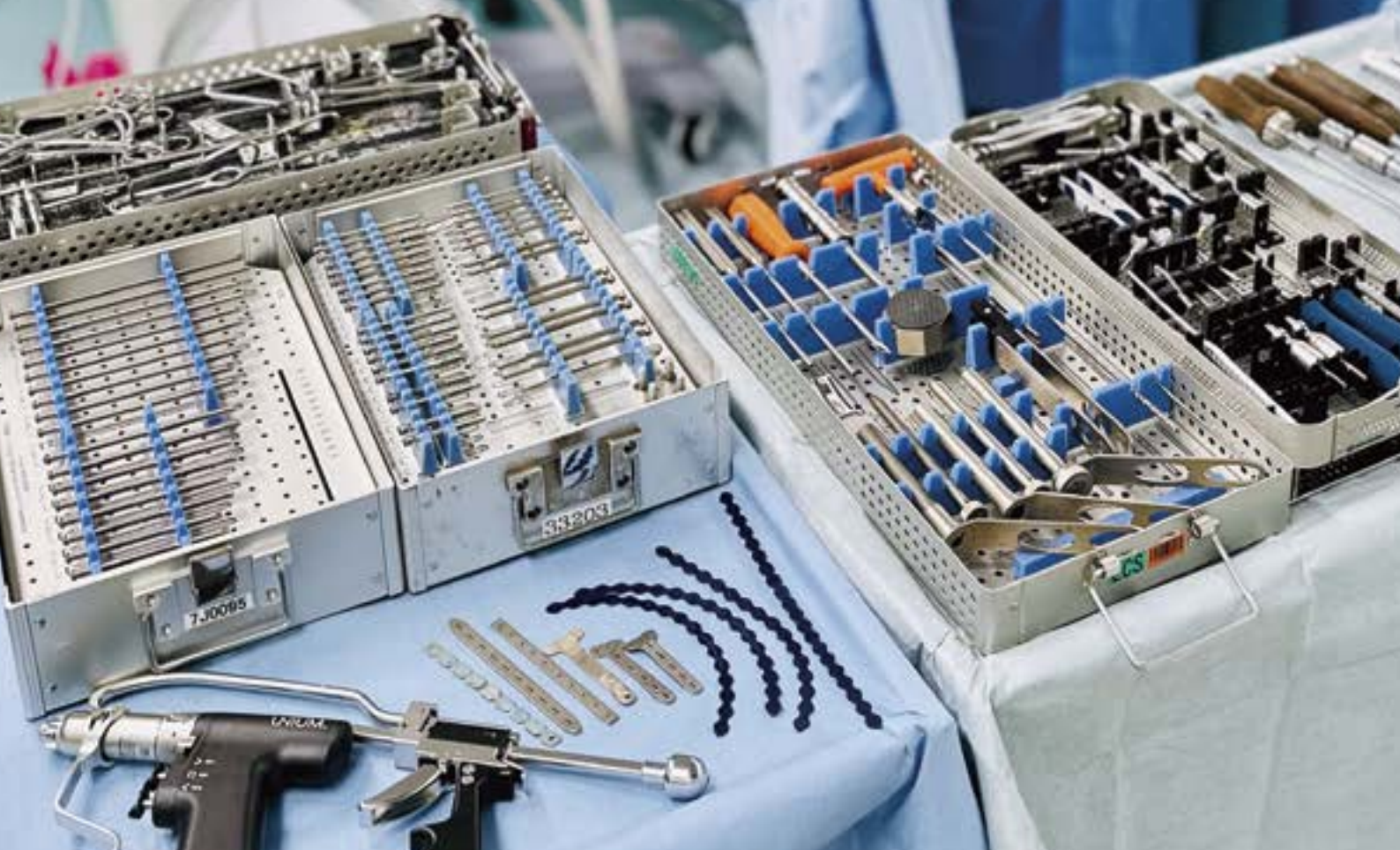


ARCH

SAISEIKAI NIIGATA KENOH KIKAN HOSPITAL

07

2024.09



再建への、 進化と挑戦。

全国的にもまだ少ない
「外傷再建センター」が設置されている
済生会新潟県央基幹病院。
「外傷再建」とは何か、その必要性和
目指す医療の姿について、
外傷再建外科の伊藤先生・普久原先生に
お話を伺いました。



DIALOGUE

外傷再建センター 副センター長
外傷再建外科 主任診療科長

普久原 朝海
FUKUHARA TOMOMI

・日本整形外科学会 整形外科専門医

外傷再建センター センター長
外傷再建外科 部長

伊藤 雅之
ITO MASAYUKI

・日本整形外科学会 整形外科専門医
・日本整形外科学会 リハビリテーション専門医
・日本股関節学会 股関節鏡技術認定医
・日本人工関節学会 人工関節専門医
・日本骨折治療学会 評議員

対 談

●外傷再建外科（センター）を立ち上げたきっかけを
教えてください。



【伊藤】私を外傷の世界に引き込んだのは、新潟県中越地震の際の医療経験と多くの人々の援助を受けたことがきっかけです。また、救急にいたときは急性期医療の大切さを知る。一方、急性期に満足に治療を受けられなかった患者さんの末路も知りました。そこから災害医療、そして急性期から慢性期までの外傷患者を取りこぼさずに援助し、穏やかな世の中の実現を目指すという目標を掲げるようになりました。そのため東日本大震災でダメージを受けた福島で医療援助にあたることも、外傷再建センターを立ち上げ、ある程度の達成感を得たことから新潟にも同様の施設を作りたいと考えたのです。

●済生会新潟県央基幹病院の当科の役割、
特徴について教えてください。

【伊藤】さまざまな種類のケガを専門的な視点で見て、一人一人の患者さんに応じた治療をすることが、後遺症をなくすことに繋がります。当科は救急科と一緒に外傷患者の急性期から対応し、将来に禍根を残さない治療をしていくというのが役割です。また骨折など硬性組織の治療だけでなく、損傷した皮膚や筋肉などを再建する軟部組織再建の治療ができることも大きな特徴です。
【普久原】例えば骨折でも、部位によって手術の特徴も異なります。当科では外傷治療をする上で専門的な分野の知識と技術を持った医師が集まり、患者ひとりとひとりと



カスタムメイドな外傷治療を提供することを目指しています。急性期から外傷の専門医が治療を行うことで防ぎえた後遺症を防ぐことが可能となりますが、それでも生じる後遺症に対して整形外科と一緒に機能再建の次の手を提供できることも特徴です。リハビリ期に専門的な視点での判断が必要な患者さんに対しては、地域のリハビリテーション病院と協力し、転院したあとも定期的に外傷再建外科医が往診してリハビリ内容を判断し、一貫した治療を受けられるシステムを構築、患者さんの社会復帰・日常生活復帰をサポートする医療を提供します。
【伊藤】そのためにはチーム連携が重要で、救急科をはじめ総合診療科など他の科とも連携して治療を行っています。

【普久原】救急外来に運ばれてきた重症外傷患者に対して救急科と外傷再建外科が一緒に初期対応することで、救命と機能再建を両立するために必要な治療を適切なタイミングで行うことが可能となります。また骨折を契機に全身状態が悪化しやすい複数の合併症をお持ちの高齢者に対しても、全身管理を総合診療科が、骨折治療を整形外科が、それぞれの専門性を活かして協力して治療を行うことで、急性期の死亡率が高い症例であっても適切なタイミングで手術を行い、日常生活復帰を目指す医療が提供できるような新潟県内初の医療体制が始まっています。

●どのような思い、使命を持って業務にあたっていますか。

【伊藤】救急科にいたときは、自分が手術をした患者さんの科を担当するので、合併症や感染症がおきても診ることができないのです。外傷再建外科は手術だけでなく、その後の対応まで長期的にトータルで診ることができるので、患者さんが笑顔で社会復帰できる世界を作りたいという思いで治療にあたっています。また、命を助けるた

めにやむを得ず機能を犠牲にした患者さんでも、再建技術を駆使することで少しでも後遺症を軽減したいとも考えています。
【普久原】外傷の専門科がある病院はまだ少ないため、病院によって治療のクオリティが大きく異なっているのが現状です。この外傷再建センターができたことで、新潟県内の重傷外傷患者を集約化して治療が可能となっていくでしょう。また当センターで外傷治療を学んだ医師が県内の病院に勤務すれば、最終的に新潟県内のどの病院でも外傷再建の理念を考慮した治療が受けられるようになります。安心して外傷治療を受けられる県であり、そのような国にしていきたい。それが私の思いであり使命です。

●外傷再建外科の目標、目指す姿について教えてください。

【伊藤】誰もが外傷再建の治療を受けられる、誰もが外傷再建の治療ができる、というのが目標です。そのために我々が医師を育成するのはもちろん、看護師やPT・診療看護師など各種の医療人を教育し、最終的に日本の災害時に活躍できる人材を作っていくことを目指しています。

【普久原】今後は24時間365日対応できるように、救急科・総合診療科を含めた外傷再建外科チームのメンバーを増やしていく必要があります。外傷治療のエキスパートを育てられる環境が整ったので、県外からも留学希望が来るような施設にしていきたいです。当院の使命は「県央地域の患者は県央で診る」ですが、外傷再建センターの使命は県央の患者だけでなく「新潟県の重傷外傷患者は外傷再建センターで診る」ことです。この大きな使命を、全力を尽くして果たしていきたいと思っています。



外傷再建外科とは

外傷再建外科は、外傷患者さんの救肢・救機能を考え専門的な治療を行い、慢性期の機能再建まで含めた医療をトータルで行う診療科です。

例えば、交通事故など高エネルギー外傷の患者さんに対しては、救命をする救急科とともに外傷再建外科医が救肢・救機能のための外傷再建を行います。

さらに整形外科や他の診療科と協力し、失った機能を代償するための治療、リハビリ、後遺症への対応まで一貫体制の医療を提供することで、患者さんの社会復帰、満足な日常生活の実現を目指します。



外傷再建センター
整形外科 医長

吉田 侑真 YOSHIDA YUMA

・日本救急医学会 救急科専門医

整形×救急で外傷診療に臨む

外傷は多種多様であり、多くの科が診療に関わることが多いですが、骨折や軟部組織損傷をはじめとした整形外科分野の外傷の頻度は高く、外傷再建外科の担う役割は大きいと考えます。また、救急科との連携は非常に重要であり、外傷患者さんの初期対応から全身管理を含め、救急科医師と協力して日々診療にあたっております。

私自身は、外傷再建を専門にする上で、外傷診療における初期対応や全身管理を学ぶことは重要だと考え、まずは救急医としての研鑽を積み、救急科専門医を取得しました。現在は、その経験を活かしながら、外傷再建外科として診療に当たっています。

特に重症外傷においては、チーム全体でのスムーズな連携を行うため、共通認識・共通言語を持って診療を行うことが非常に重要であり、整形×救急という専門性の協働が重要となります。

患者さんのスムーズな社会復帰を目標とし、県央地域、そして新潟県の外傷診療の中心となることが、当院の外傷再建外科の役割であると考えます。



外傷再建センター
整形外科 医長

山田 政彦 YAMADA MASAHIKO

・日本整形外科学会 整形外科専門医

全国に発信できる外傷治療

手を含む上肢は、骨・関節・神経・血管・腱・皮膚などが狭い空間内に精密に配置されており、小範囲でもピンポイントで損傷を受けると大きな障害につながる場合があります。そのため、骨だけでなく、その周囲の損傷を受けた神経・血管・軟部組織に対して、解剖学的な知識を生かして修復を行います。残念ながら重度外傷では全てを元に戻すことが困難な場合もありますが、患者さんの日常生活で必要となる機能と、医療が提供できることを話し合いながら治療を行います。

転落外傷や交通事故などによる重度四肢外傷では、開放骨折に伴い皮膚・脂肪組織などが欠損し、骨が露出することがあります。昔であれば切断せざるを得ない広範囲の損傷に対しても、現在は遊離皮弁術という遠隔から自己組織を採取して移植する技術を用いて救肢が可能です。そのような、顕微鏡を用いてミリ単位の血管を吻合する技術を駆使し、四肢再建を行います。

当科は県内唯一の外傷再建外科であり、県央地区はもちろんのこと、新潟県、そして全国に発信できる外傷治療を行いたいと考えています。



県央から世界へ、世界から県央へ。

済生会新潟県央基幹病院の救急科で研修中の後期研修医・Chen Xingjia（チェン シンジャ）先生。

この度、新たなステップアップのためにMBAの学位取得を目指し、スペインへ海外留学されることとなりました。留学への意気込みと帰国後の展望について、幅広い視点でお話を伺いました。



救急科 後期研修医

Chen Xingjia

チェン シンジャ

●現在の主な業務と、留学を決めた経緯を教えてください。

救急外来と、担当する患者さんの診療が主な業務です。救急外来では、まず患者さんを受け入れるかどうかを判断し、受け入れる場合は患者さんの病態を診た上で診療科を考え、救急科で受け持つ場合はほかの先生が担当します。

留学については、もともとシンガポール人ということもあり、自分のバックグラウンドを活かして海外で学びたい、生活したいという思いは高校生の頃からありました。実は大学6年の時にイギリスとシンガポールに1カ月ずつ臨床実習に行くことが決まっていたのですが、コロナ禍のため渡航2日前にキャンセルに。それからもいつか留学したいと思っていました。

●なぜMBAを選ばれたのか。留学先で何を学びたいのか教えてください。

研修医になって、次の目標を考えたときに一番心がとぎめいたのがMBAでした。大学時代に参加したゼミの先生がハーバードMBAホルダーの医師。インターンをしていた会社の社長もMBAホルダーの医師で、先生方が素晴らしいサービスで社会に大きなインパクトを与えていくのを見て、私も先生方のようになりたいという思いを強くしました。また、医師がMBAホルダーになることで、医療の世界

にずっといると視界に入らない課題が、解像度よく見えてくるのではないかと思います。

この留学では経営の基本から、トップマネジメントのDecision Making、つまり人を率いる立場の人がどのような視点を持ち、1つ1つ決定を下すのかというのを学んでいきます。これまでの仕事と照らし合わせながら、今より5つ上の視点まで持てるようになりたいです。また、いつか自分で作ったサービスをアジア、世界に展開させるのが夢で、具体的には決めていませんが、今は女性のメンタルヘルズに焦点を当てていきたいと考えています。そのためにも多様なクラスメイト達との協働を通して、グローバルリーダーとしての資質を身に付けたいです。

●留学経験をどのように仕事に活かし、県央地域に還元していきたいですか。

私が留学から帰ってくる頃、県央基幹病院は開院3年目を迎え、地域にかかせないインフラとして広く認識されていると思います。その後も持続的に地域に貢献していくために、経営的な視点から解決すべき課題を洗い出し、MBAで得た世界各国、いろいろな産業の課題解決の手法を応用しながら、一つずつできることを進めていければと考えています。

また、病院と地域をもっと繋げられるような取り組みを、持続できる形で行っていきます。近隣の飲食店と提携して、職員の皆さまに健康的なランチを提供する取組みを始めましたが、MBAに行っている間にもこの取組みがもっと大きくなっていいなと思います。





〈今月号の表紙の写真について〉

外傷再建外科の手術では、整復鉗子、ドリル、スクリュー・プレートその他、顕微鏡を用いたマイクロサージャリーなど多様な器具が使用されます。

骨の整復とインプラントの正確な配置、あるいは神経や血管などの修復・縫合において、精密な卓越した技術が求められます。



社会福祉法人

恩賜
財団

済生会新潟県央基幹病院

〒955-0091 新潟県三条市上須頃5001番地1

TEL.0256-47-4700 FAX.0256-33-8808

<https://www.kenoh.saiseikai.or.jp/>

病院のサイトには
右記QRより
アクセスしてください

